

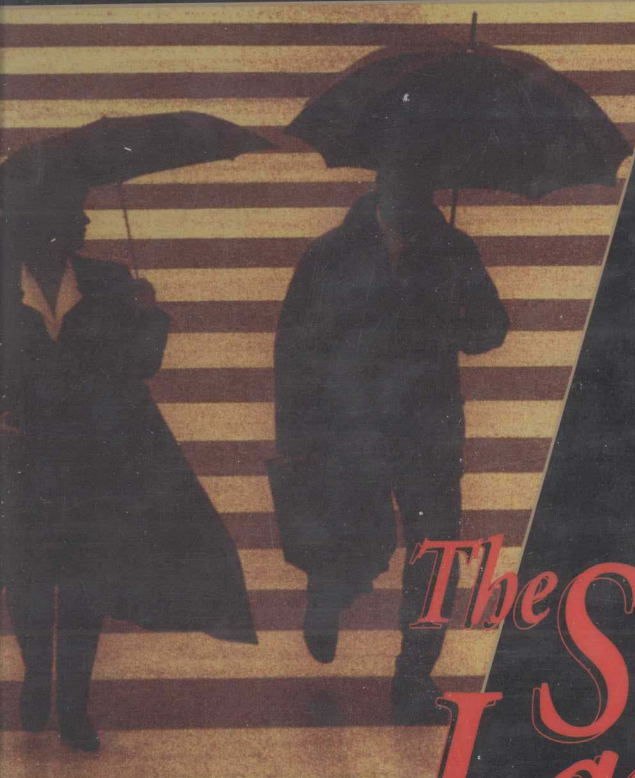
ジョン・グリシャム

白石 朗 訳

路上の

弁護士

*The Street
Lawyer*



路上の
弁護士

工業学院図書館
藏书章

John Grisham



THE STREET LAWYER

by John Grisham

Copyright © 1998 by John Grisham

Japanese edition first published in 1999 by Shinchosha Company

Japanese translation rights arranged with Belfry Holdings, Inc.

c/o Rights Unlimited, New York through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

ろじょう べんごし
路上の弁護士

ジョン・グリシャム しらishi ろう 白石 朗訳

発行 1999.10.25

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社 郵便番号 162-8711/東京都新宿区矢来町71

振替：00140—5—808

電話：編集部 (03) 3266—5411

読者係 (03) 3266—5111

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Rou Shiraishi 1999, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-525007-8 C0097

路上の弁護士

ゴムの長靴をはいたその男は、ぼくのすぐうしろからエレベーターに乗りこんできたが、最初は姿が目にはいらなかった。しかし、においは嗅ぎとれた——煙と安ワイン、それに石鹼のない路上生活のつんと鼻をつく刺戟臭。上にむかうエレベーターに乗っていたのは、ぼくたちふたりだけだった。しばらくしてうしろをちらりとふりかえると、長靴が——それも、大きすぎるほどの汚れた黒い長靴が見えた。端がすりきれてぼろぼろになったコートが、男の膝のあたりまで垂れ下がっていた。コートの下では不潔な衣類が腹まわりを幾重にもとりまいており、そのせいで男は肥満体といえるほど恰幅がよさそうに見えた。しかし、これは栄養状態がいいからではない。真冬のワシントンDCでは、路上生活者は手もちの服をありったけ身にまとう。それで太っているように見えるだけだ。

黒人の中年男だった。髪の毛もひげも白髪混じりで、もう何年も洗っていないし、刈ったこともなさそうだ。

男はぼくを完全に無視したまま、黒いサングラスの奥からまっすぐ前を見つめているばかり。つかのま、自分がなぜこの男をじろじろ見ているのかという疑問が頭をかすめた。

この男が、ここにいるべき人間ではないからだ。ここは男の建物ではないし、男のエレベーターではない。この男が足を踏みいれられる場所ではないのだ。この八階建てのビルを占めている法律事務所の弁護士たちは、ここで働きはじめて七年たったばかりにさえ不届きに思えるほど高額の時間給で仕事をしている。

またしても、寒さを避けるために浮浪者がビルにはいりこんできたのか。ワシントンのダウンタウンでは日常茶飯事ではある。しかし事務所は、この手の連中を追いはらうために警備員を雇っているのではなかったか。

エレベーターが六階で停止したときになって、男が目的の階数ボタンを押していなかったことに気がついた。

男はぼくについてきただけだ。ぼくはすばやくエレベーターを降りると、ヘドレイク&スウィーニー法律事務所の豪華な大理石づくりの受付ホールに足を踏みだしながら肩ごしにちらりと視線を投げた。男はまだエレベーターのなかに立つており、あいかわらずぼくには目もくれないまま、宙をにらんでいた。

弾力的な応対が得意な受付係のひとりであるマダム・

デヴィエが、いつもの見くだすような表情でぼくを出迎えた。

「エレベーターに気をつけてくれ」ぼくはいった。

「どうしてです？」

「浮浪者が乗りこんでるんだ。警備課に連絡したほうがいいかもしれない」

「あの連中ときたら」マダム・デヴィエはフランス語訛りのある声でいった。

「消臭スプレーもまいたほうがいいな」

ぼくはそれっきりエレベーターの男のことを忘れ、肩をそびやかしてコートを脱ぎながら、その場を離れた。きょうは午後いっぱい、会議の連続だ。どれも重要な人たちとの重要な会合である。廊下の角を曲がって、秘書のポリーに声をかけようとしたそのとき、最初の銃声がきこえた。

マダム・デヴィエは受付デスクのうしろに恐怖の表情で立ちすくみ、われらが浮浪者の友人がかまえた拳銃の恐ろしく長い銃身を見つめていた。ぼくがマダム・デヴィエのそばにまっさきに駆けつけた人間だったからだろう、男は鄭重なしぐさで銃口をぼくにむけてきた。ぼくは凍りついた。

「撃つな」ぼくはそういって、両手をかかげた。それなりに映画を見ているので、こういった場面ですら行動す

ればいいかは心得ている。

「黙れ」男は落ちつきはらった口調でつぶやいた。

背後の廊下で、人の声がきこえた。「やつは銃をもつてろぞ！」と叫ぶ声もした。ついで声はどんどん遠ざかり、小さくなった。わが同僚諸兄が裏口から逃げだしていったのだろう。彼らが窓から飛びおりて逃げていく光景さえ見えるようだった。

ぼくのすぐ左手には重厚な木製の扉があり、その奥が大きな会議室になっていた。ちょうどこの瞬間、会議室には訴訟部に所属する八人の弁護士がいた。人々を食物にすることで毎日を過ごしている、いずれも恐れを知らぬ不屈の八人の猛者たち。なかでも、いちばんタフな弁護士は、いつでも闘志をみなぎらせた小型魚雷ともいうべきラフターという男だった。このラフターが会議室の扉をあけて、「なんの騒ぎだ？」といったとたん、銃口がすばやくぼくからそしてラフターに狙いをつけた。と同時に長靴の男は、目あてのものを狙いつけた。

「銃をおろせ」ラフターが戸口に立ったまま命令した。

つぎの瞬間、二発めの銃声が受付エリアに轟いた。弾丸はラフターの頭上はるか上の天井に命中し、この弁護士を命惜しさ一心のただの人間に変えた。浮浪者は銃をまたばくにむけると、ひとつうなずいてみせた。ぼくはその命令にしたがって、ラフターのあとから会議室には

いつていった。会議室の外側の光景でさいごに見えたのは、デスクの前に立ち、恐怖に身をふるわせているマダム・デヴィエの姿だった。電話用のヘッドセットがその首をとりまいており、ハイヒールの靴はきちんとごみ箱の横においてあった。

ゴム長靴の男はぼくのうしろで扉を乱暴に閉めると、八人の弁護士たち全員を感服させようというつもりか、ゆつくりと銃をふりまわした。これには効果があつたようだ。なにより発砲したばかりの銃から立ち昇るにおいが、銃のもちぬしの体臭以上に、はつきりと鼻をついてきたからだ。

会議室の中心を占めているのは大きなテーブルで、つい数秒前まではすこぶる重要に思えていた文書や書類で埋めつくされていた。横一列にならぶ窓からは駐車場が見おろせる。ふたつある扉が廊下に通じていた。

「壁ぎわにならぶんだ」男は銃をきわめて効果的な指示棒がわりにつかいながら、そう命じてきた。ついで男は銃をぼくの頭のすぐ近くにもちあげて、言葉をつづけた。「ドアに鍵をかける」

ぼくはその言葉にしたがつた。

あたふたと奥の壁にむかつていくあいだ、八人の弁護士たちはひとことも口をきかなかつた。ぼくも口をつぐんだまま、ふたつの扉に鍵をかけると、これでいいかと

たずねる意味で男の顔を見つめた。

なぜかはわからないながら、郵便局で起きた恐るべき発砲事件のことが頭から離れなかった。怒りに駆られたひとりの職員が、銃器をたずさえて昼食からもどつてくると、そのまま十五人の同僚をみな殺しにした事件だ。

ある学校の校庭で起きた大量虐殺事件のことも。さらに、ファーストフード店での無差別殺人事件も。

そうした事件で犠牲となつたのは、罪もない子どもたちか、ごくまっとうな一般市民である。ぼくたちはといえば、全員が弁護士なのだ！

男はひとしきりうなり声をあげて銃をふり動かすことで、八人の弁護士たちを壁にそつてならばせ、彼らの位置に満足すると、こんどはぼくに注意をむけてきた。なにが目あてなのか？ なにか要求を突きつけてくるのか？ もしそのつもりなら、この男は要求どおりのものを手にできるはずだ。サングラスのせいで、男の目は見えない。しかし、向こうからはぼくの目が見える。そして銃は、そのぼくの目にむけられていた。

それから男は不潔なトレレンチコートを脱ぐと、新品のコートをあつかうように畳んで、テーブルのまんなかにおいた。エレベーターのなかで不快に思えたあの悪臭がまた鼻をついたが、そんなことはもうどうでもよくなっていた。男はテーブルの端に立つたまま、つぎの服をゆ

つくりと脱いだ——ぶあつい灰色のカーディガンだった。ぶあつく見えたのには、それなりの理由があった。カーディガンの下で、男は赤い棒状のものをいくつも腰に巻きつけていたのだ。なんの知識もないぼくの目には、それがダイナマイトに思えた。それぞれの棒の両端には、色とりどりのスパゲティのような導線がつながれており、銀色のダクトテープがすべてをひとまとめにしていた。

とつさに突きあげてきた衝動——それは両手両足を大きくふりまわしながら全速力で扉めがけて走り、男が銃を撃ちそんじることを願いながら大急ぎで鍵をあげ、男が二発めも撃ちそこなうことを祈りつつ扉から廊下に飛びだしていきたい、というものだった。しかし膝はがくがくふるえ、全身の血が凍りついていた。壁にそつてならんだ八人が小さな悲鳴や低いうめき声を洩らし、これが犯人の廬にさわったようだ。

「頼むから静かにしてくれ」その口調は、忍耐づよい大学教授を思わせた。

その冷静さに胸騒ぎがした。男は腰のまわりのスパゲティの何本かの位置をなおすと、大きめのスラックスのポケットから几帳面に巻かれた黄色いナイロンロープと飛びだしナイフをとりだした。

それから男は、目の前にならぶ恐怖に凍りついた九人の顔の前でたつぷりと銃をふりまわして、こういった。

「おれは、だれひとり傷つけたくないんだ」

耳に心地よく響く言葉ではあったが、本気で信じられるものではなかった。目で数えると、赤い棒はぜんぶで十二本——それだけあれば、一瞬で苦痛なく死ぬるのは確実だ。

ついで、また銃がぼくにむけられた。

「おまえだ」男はいった。「こいつらを縛れ」

ラフターが早々と痺れを切らした。わずかに前に進みでて、こういったのだ。「なあ、きみ、いったいなが目あてなんだ？」

三発めの銃弾がラフターの頭上を飛んでいって天井に命中し、だれも傷つけないまま壁材にめりこんだ。銃声は大砲のように響きわたり、マダム・デヴィエかほかの女性スタッフかはわからないが、だれかが受付エリアで悲鳴をあげた。すばやくしゃがみこんだラフターだったが、立ちあがろうとするとともに、アムステッドのたくましい時に思いきり胸を打ちつけ、また壁に寄りかかった姿勢に逆もど里した。

「静かにしている」アムステッドが歯を食いしばったまま、低く吐き捨てた。

「なれなれしく、きみ」呼ばわりするな」男がいい、きみ」といふ呼びかけは瞬時に却下された。

「だったら、どう呼びかければいいんですか？」ぼくは

たずねた。自分が人質のリーダーになるような感じがしたからだ。この質問を口にするときには慎重に語調をえらび、大いにへりくだった口調にしてみた。男は多くの敬意が氣にいったようだった。

「ちゃんと旦那さまと呼んでもらおうか」男はいった。

「ミスター」という呼びかけに異議ある人間は、この部屋にはひとりとしていなかった。

電話が鳴った。一瞬、男が電話にむかつて銃をぶっばなすにちがいないと思った。しかし男は、電話にむかつて手をふった。それでよくは、電話をテーブルの男のすぐ前まで運んだ。男は左手で受話器をとりあげた——右手はあいかわらず銃をかまえ、その銃口はまっすぐラフターにむけられていた。

もしぼくたち九人の投票で、ことが決まるのなら、ラフターこそ最初の生贄の山羊になる人間にちがいない。それも八対一で。

「ああ」男はいい、すこし相手の話に耳をかたむけていただけで、すぐに受話器をもどした。それから慎重な身ごなしでテーブルの上座の椅子まであとじきると、腰をおろしてぼくに命じてきた。「ロープを手にもて」

男の要望は、八人全員の手首を縛りあわせろというものだった。ぼくはロープを適当な長さに切ると、わが同僚諸兄の顔をできるかぎり見ないように努めながら、彼

らの死期を早める作業を進めた。そのあいだずっと、背中に銃が押しあてられていた。男は全員の手首をきつく縛りあげるように命じてきたが、ぼくは血が流れるほど嚴重に縛っているように見せかけながらも、できる範囲で精いっぱいロープをゆるめに縛った。

ラフターが小声でなにかつぶやき、ぼくはその頬を張りとはしてやりたくなった。アムステッドはうまく手首を折り曲げてくれたので、縛りおえたときには、その氣になればすぐにロープをほどけるほどだった。マラマッドは汗をかき、呼吸を浅くしていた。このメンバーではいちばん年上で、唯一のパートナー。二年前にいちど心臓発作を起こしている。

八人のうちでは友人といえるバリー・ナッツォのときには、我慢しきれず顔を目をむけた。年齢もおなじ三十二歳なら、事務所にはいったのもおなじ年。バリーはプリンストン大学出身でぼくはエール大学。ふたりとも、ロードアイランド州プロヴィデンス出身の妻をめとった。バリーの結婚生活は順風満帆だった。結婚後四年で、三人の子宝に恵まれていたのだ。ぼくの結婚生活は、長期にわたる崩壊プロセスの最終段階にさしかかっていた。バリーと目があつた——その瞬間ふたりとも、バリーの子どもたちのことを考えていた。自分に子どもがいないことが幸運に思えた。

そのあと無数にきこえてくるサイレンの第一陣が、耳にとどいた。ミスターがぼくに、五つある大きな窓のブラインドをすべておろすように命じた。この作業を順番にこなしていくあいだ、自分の姿を見られる人間がいれば命が助かるとでもいうみたいに、ぼくは下の駐車場に目を走らせていた。駐車場には、緊急灯をつけたパトカーが一台だけとまっていた。してみると、すでに警官たちがこの建物内にはいつているのだ。

そして、この部屋にはぼくたちがいた——九人の白人とミスターが。

最新の資料によれば、全世界でヘドレイク&スウィーニー法律事務所へに所属する弁護士は八百人だった。その半数が、いまミスターがテロ行為を働いているワシントンDCのこの建物にいる。ミスターは、自分が銃と十二本のダイナマイトで武装していることを「上司」に電話で教えろ、とぼくに命じた。ぼくは自分の所属する反トラスト法部門のマネージング・パートナーであるルドルフに電話をかけ、メッセージをそのまま伝えた。

「きみは無事なのかね、マイク？」ルドルフがたずねてきた。ミスター専用となった新型スピーカーフォンの音量を最大にしての会話だった。

「ええ、まったく無事です」ぼくは答えた。「とにかく、

この人の要求をすべて飲んでください」

「要求とは？」

「まだわかりません」

ミスターが銃をふり、電話での会話は打ち切られた。

拳銃の動きの合図で、ぼくは会議用テーブルの横、ミスターから二、三メートル離れた自分の持ち場に引き返した。ミスターは、胸のあたりでとぐろを巻く導線をぼんやり指でもてあそぶという、人の神経を逆なでするような習慣を身につけだしていた。

ミスターは下を見おろし、赤い導線をすこし引っぱった。「この赤いのが見えるだろ？ こいつを思いっきり引く。それで一巻のおわりだ」

このちよつとした警告を口にしおわると、男はサンダラスの奥からぼくをじつと見つめた。ぼくは、なにか返答の言葉を口にする必要に駆られた。

「なんでそんなことをしようというんですか？」とにかく会話の糸口をつかみたい一心だった。

「したくはないとも。しかし、おれの勝手じゃないか」男の口調が、ぼくには意外だった。急ぐ調子のまったくない、悠揚せまらぬ几帳面なリズム。どの音節も、同等のあつかいをうけてもいる。いまはホームレスになっているが、過去にはそれなりの暮らしをしていたにちがいない。

「なんでぼくたちを殺そうとしてるんです？」ぼくはたずねた。

「おまえらと議論をする気はない」男は宣言した。質問は以上です、閣下。

時計に縛られて暮らしている弁護士という職業柄だろう、ぼくは腕時計を確かめた。もしぼくたちが生きのびられたらの話だが、この事件のすべてを、正しく記録にとどめておくことができるようにだ。時刻は一時二十分。ミスターは静かな状態が望みだったので、ぼくたちは神経がすり減りそうな沈黙の時間を、すでに十四分も過ぎたことになる。

自分たちがこのまま死ぬなんて信じられなかった。男にはこれといった動機もないようだし、ぼくたちを殺す理由もないように思えた。この部屋にいる人間のだれひとり、この男に会ったことがないのは確実だった。エレベーターに乗っていたときのことを思いかえしても、この男は特定の階を目ざしていたわけではなかった。男は人質をさがしていた狂人にすぎない。となれば、遺憾ながら昨今の一般常識では、死人が出るのはごく当然のこととなる。

いふなればこれは、二十四時間にわたって新聞の大見出しを独占して、人々があきれかえってかぶりをふるたぐいの無意味な大量殺人事件だ。そしてしばらくあとに

は、こんどは死んだ弁護士にまつわるジョークが発生するのだろう。

新聞の見出しも脳裡に浮かんだし、テレビのレポーターたちの声もきこえた。しかし、それが現実になると思うことを、ぼくは断固こばんだ。

受付エリアから人の話し声が、外からサイレンの音がきこえた。廊下のずっと先のほうで、警察無線がかん高い金切り声をはりあげている。

「昼食にはなにを食べたんだ？」ミスターがぼくにたずねる声が、室内の静寂を破った。

驚きのあまりとつきに嘘も出てこなくなり、ぼくは一瞬ためらったのちに答えた。「グリルド・チキンのシーザーサラダ添えですが」

「ひとりで食ったのか？」

「いや、友人といっしょに」フィラデルフィアから、ロースクール時代の仲間がやってきていたのだ。

「ふたりぶんの勘定はいくらだった？」

「三十ドル」

これがミスターの気にさわった。

「三十ドルだと？」ぼくの言葉をくりかえす。「ふたりぶんの食事ですか」

ミスターはかぶりをふって、八人の弁護士たちに目をむけた。男がここでアンケートを続行するのなら、八人

にはなんとしても嘘をついてほしい。ここにいるメンバーのなかには驚くほどの美食家もいる。彼らにとって三十ドルは、オードブルの代金にもならない。

「おれがなにを食べたか知ってるか？」男がぼくにたずねた。

「知りません」

「スープだよ。ホームレスの救護所でスープとクラッカーを食べた。無料のスープだね。ありがたかったさ。三十ドルもあれば、おれの仲間百人ぶんの食事がまかなえる。知ってたか？」

ぼくは、ついいましたが自分の罪の重さに気づいたような顔で、重々しくうなずいた。

「全員の財布と金、時計や装身具のたぐいをあつめるんだ」男はまた銃をふりまわしながらいった。

「理由を教えてもらえますか？」

「いやだね」

ぼくはまず自分の財布と時計、それに現金をテーブルの上におくと、人質仲間のポケットをあさりはじめた。

「おれの仲間のためだよ」ミスターがいい、ぼくたち全員が安堵の吐息をついた。

つづいて男は掠奪品をすべてブリーフケースにおさめて鍵をかけ、もういちど「上司」に電話をかけるようぼくに命じてきた。ルドルフは、最初の呼出音で電話に出

てきた。ルドルフのオフィスにSWATチームのリーダーがキャンプを張っている光景が目に見えるようだった。「ルドルフ、ぼくです、マイクです。スピーカーフォンで話します」

「ああ。きみは無事か？」

「ええ、ご心配にはおよびません。いまからこちらの紳士の要求で、ぼくが受付エリアにいちばん近い扉をあけ、廊下にブリーフケースをおいて、またドアを閉めて鍵をかけます。わかりましたか？」

「ああ」

後頭部に銃口を押しつけられた姿で、ぼくはゆっくりと扉を細くあけると、廊下にブリーフケースを投げだした。どこにも人の姿は見えなかった。

大規模法律事務所の弁護士たちが時間単位で報酬を請求するという快楽から切り離される機会は、数えるほどしかない。そのひとつが睡眠だが、ぼくたちはほとんど眠らないときている。食事の時間はいえ、報酬請求にまわすことを奨励されていた——依頼人が勘定書きを手にとった場合はなおさらだ。刻一刻と時間がたっていくにつれ、ぼくの頭にこんな疑問が芽ばえてきた。この人質事件の終結を待っている時間を、この建物にいるほかの四百人の弁護士たちは、いったいどうやって報酬請

求にまわすのだろうか？ 駐車場を見おろせば、その弁護士たちの姿が見えるはずだった。どうせほとんどの連中は車のなかにすわって暖をとり、携帯電話でだれかと話をしながら、この時間をだれかの勘定につけているのだろう。この事務所は、一分一秒たりともおろそかにしないのだから。

下にいる無慈悲な仕事の鬼たちのなかには、この事件がどのようにおわるかということを気にもかけていない連中もいるはずだ。とにかく事件に早くけりがついてほしい一心で。

ほんの一瞬だったが、ミスターがうたた寝をしたように見えた。頭を重そうにうなだれ、息づかいが重々しいものになっていた。ラフターがうなり声を洩らして多くの注意を引き、「行動を起こせ」といったげに顔を片側に強くふり動かしてみせた。ただし問題があった——ミスターが右手に銃を握り、ほんとうに寝入っているにしても、左手は忌まわしい赤い導線をしっかりと握りしめたままだったのだ。

ラフターは、よくに英雄になることを求めている。ラフターはたしかに勇猛果敢な性格では事務所屈指であり、手柄も多い訴訟担当弁護士だが、まだパートナーの椅子についているわけではない。よくとおなじ部課にいるわけでもないし、事務所は軍隊ではない。だから、よくは

あえてラフターの命令を無視した。

「去年、おまえはいくら稼いだ？」ミスターがばつちりと目を覚まし、はつきりした声でよくにたずねてきた。

よくは、またしても驚かされていた。「ああ……ええと……そうですね……」

「嘘は禁物だぞ」

「十二万ドルです」

この答えも、男の気に食わなかった。「そのうちのどのくらいを寄付した？」

「寄付？」

「ああ。慈善事業への寄付だ」

「そういうことですか。いや、覚えてません。家計のこととは、ほら、妻にすべてまかせているので」

八人の弁護士たちが、いつせいに身じろぎをしたように思えた。

ミスターはこの答えが気に入らなかったようだし、答えをごまかされて黙っているつもりもないようだ。「おまえの税金の書類は、だれがつくった？」

「国税庁に提出する書類という意味かな？」

「そう、それだ」

「作成したのは、うちの事務所の税金部門です。こここの二階にあります」

「このビルのか？」

「ええ」

「よし、その書類をここにとどけさせろ。ここにいる全員の税金関係の書類を、おれに見せるんだ」

ぼくは弁護士たちの顔を見た。そのうちふたりばかりは、「どうしても勝手にしろ」といいたげな顔をしていた。どうやら、ぼくはあまりにも長く躊躇していたようだ。というのもミスターが「早くしろ！」と胸間声を張りあげたばかりか、同時に銃の引金まで引いたからだ。ぼくはルドルフに電話をかけた。ルドルフもためらっていたが、ぼくは大声でわめいた。

「とにかく、すぐこの部屋あてにファックスで送ってください」それからこういいそえる。「去年のぶんだけにかまいませんから」

それからぼくたちは、所得税申告書の送信が遅くなったら、それを理由にミスターが処刑にとりかかるのではないかと怯えながら、部屋の隅のファックスマシンを十五分間にわたってただにらみつけていた。

2

グループの書記役をおおせつかったばかりのぼくは、ファックス用紙の束を握りしめて、ミスターが銃口でさし示した場所に腰をおろしていた。ロープで縛られ、壁を背にしてろくに動くこともできない姿勢で二時間近くも立たされたままの仲間たちは、そろそろ前かがみになり、肩を落したり、つらそうな顔を見せたりしはじめていた。

しかし、ここに来て一同の不快指数は劇的に上昇することになった。

「最初はおまえだ」男はぼくにいった。「名前は？」

「マイクル・ブロックです」ぼくは丁寧に応えた。こんごともよろしく、だ。

「去年おまえはいくら稼いだんだ？」

「その質問にはさつきも答えました。十二万ドルです。税引前の額で」

「そのうちいくら寄付にまわした？」

嘘でごまかせるという確信はあった。税務弁護士でな

いとはいえ、男の質問をうまくかわせる自信があったのだ。ぼくは自分の所得税申告書を見つけたすと、たつぷりと時間をかけて書類のページを繰っていった。昨年はクレアが二年めの外科レジデントとして三万一千ドル稼いだため、ふたりあわせた年収はかなりの額になっていた。しかし払った税金の総額は——連邦所得税をはじめ、驚くほど多種多様な税のおかげで——五万三千ドルにもなっており、それ以外にも学資ローンの返済があり、クレアの学費があり、ジョージタウンの高級アパートメントの家賃としてひと月二千四百ドルが必要で、ローン必須だった二台の新車の返済にも追われているほか、もろもろの快適なライフスタイルを維持するために必要な出費があつたせいで、貯金はユニット型投資信託への二万二千ドルにとどまっていた。

ミスターは辛抱づよく待つていた。ありていにいえば、この辛抱づよさにぼくは不安をかきたてられていた。いまごろはSWATが空調設備のダクトにもぐりこんだり、近くの木に登ったり、となりのビルの屋上に散開したり、この会議室の設計図を調べたり、そのほかテレビでやっているような手立てをつくして、たつたひとつの目的——つまりこの男の頭蓋骨に銃弾を叩きこむこと——を達成しようとして躍起になっているはずだ。それなのにこの男は、そんなことも知らぬげな顔をしている。自分の運

命をありのままにうけとめて、死ぬ覚悟ができてゐるわけだ。ところが、ぼくたちはちがう。

男はあいかわらず赤い導線をいじくっており、おかげでぼくの動悸は一分あたり百以上にはねあがっていた。

「エール大学に千ドル寄付しましたよ」ぼくは答えた。

「それから、地元のヘアアメリカの^{チャリティ}とるべき道^{ドット}連合」に二千ドルです」

「貧しい者にはいくらの金を寄付した？」

エール大学に寄付した金が、本来それが必要としている学生にとどいたかどうかは怪しいものだ。「ヘUNAイツドウエイ」はこの街じゅうに金をばらまいてるから、一部は貧しい人を助けるのにつかわれているはずだ」「飢えた人にはいくら寄付した？」

「五万三千ドルの税金をおさめました。そのかなりの部分が福祉やメディケイド健康保険や児童扶助といった方面にまわされたはずですね」

「自発的に金をさしだしたのか？ 寄付の精神で？」

「税金をおさめることに不満はありませんが」ぼくは、わが国の同胞の大多数とおなじく嘘をついた。

「これまでに飢えた経験は？」

男は単純な答えを欲しがっている。それにぼくの機知や皮肉の精神は、もっか開店休業中だった。「いや、その経験はありません」

「雪のなかで寝たことは？」

「ありません」

「おまえときたら、それだけの大金を稼いでいながら、まだまだ欲をかきやがって、歩道に立っているおれに小銭ひとつよこさない」男はほかの弁護士にむかつて銃をふりたてた。「おまえら全員だ。おれが歩道にすわってお恵みをせがんだって、おまえたちはただ通りすぎるだけ。気どりくさったコーヒー一杯に、おれが何回も食事できる金を出すくせにな。なんで貧しい人や病氣の人やホームレスを助けようとしらない？ 腐るほど金がありやがるくせに」

気がつくとはくは、ミスターといっしょに欲深な我利我利亡者たちの顔を見つめていた。見ていて気持ちのいいものではなかった。ほとんどの弁護士たちは目を伏せて、自分の足を見つめている。ただひとり、ラフターだけがテーブルをにらみつけていた。その頭にはきつと、ワシントンDCにいるミスターの同類たちを無視して通りすぎるとき、ぼくたち全員の頭に浮かぶ思いが去来しているはずだ。そう、もしここでこの乞食に小銭をくれたとしても、(一) どうせ酒屋に駆けつけるだけだし、(二) さらに金をせびられるだけで、(三) どうせ路上生活をやめやしない——という思いだ。

またしても静寂。建物のすぐ上空をヘリコプターが旋

回している。駐車場でなにが計画中なのかは想像するしかない。ミスターの指示にしたがって電話が保留の状態にされているため、外部との通信手段はまったくなかった。ミスターには、だれかと話をしたり交渉をしたりするつもりはないのだ。熱心に耳をかたむける聴衆なら、この会議室にそろっている。

「このなかで、いちばん稼ぎのいいのはだれなんだ？」男がぼくにたずねた。

この場にいるパートナ―はマラマッドだけだった。ぼくはファックス用紙の束をめくって、マラマッドの書類をさがした。

「たぶんわたしだろうな」マラマッドが口をひらいた。

「名前は？」

「ネイサン・マラマッド」

ぼくは、マラマッドの所得税申告書を手早くめくっていった。パートナ―の成功ぶりを仔細に数字で検証できるというめつたにない好機ではあったが、ちつとも楽しい気分になれなかった。

「いくらだ？」ミスターがぼくにたずねた。

国税庁の税制のすばらしさよ！ どの数字がお好みでしょう？ 総収入？ 調整後総所得？ 実収入？ 課税所得？ 給与所得？ それとも事業および投資所得？ マラマッドが事務所からもらっている月給は五万ドル。